

# 鮭鱒彙報

第五十七号  
創刊三十周年纪念号

## 北海道鮭鱒增殖漁業協同組合

編集後記	鮭鱒彙報総目録	附録	増協通信	彙報	養殖とは何ぞや	七十前創立当時の千歳孵化場	鮭鱒彙報と私	創刊三十周年を迎へて
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
(四八)	(二五)		(二一)	(二〇)	御名神岳史(一四)	半田芳男(一〇)	岡田 雋(六)	半田芳男(一)



# 祝

北海道鮭鱒孵化事業創基八十周年

千歳孵化場創立七十周年

## 創刊三十周年を迎へて

半田芳男

北海道の鮭鱒孵化事業は鮭鱒漁業の重要性に関連して古くから漁業者は深い関心を有しておつたことはいろいろの文献に徴して明かである。殊に明治十七年伊藤一隆氏等が北海道の水産振興の基本としての学術研究の忽にし得ないことから北水協会なる団体を設立して広く資源保護に関する研究に努力した。その最初の貢献は明治二十一年の千歳中央孵化場の設立である。これは氏が明治十九、二十年に亘り水産調査のため渡米した際実地につき研究調査したバツクスポート孵化場、コロンビア川上流ボンナビルに在る捕魚車その他各地に於て見聞をひろめた結果を本道に應用したものである。千歳中央孵化場はその各称の示す通り本道の本事業の中心となりその振興に寄与したことは今更多言を要しない。

然し鮭鱒漁業の状態は漁護力の増進により漁護高は漸次増大し明治二十二年は鮭一千余万尾の漁護を見たがこれを峠として以後は漸減し明治四十二年には僅か百余万尾に過ぎなかつた。斯くして前途寒心に堪へざるものあるによりこれが対策として在来の地方費補助にまさる強力なる孵化放流事業を施行することになつた。即北海道拓殖計画に

この事業の振興をとりあげ拓殖費支辨により重要河川の孵化場を官営とし其他の民営にはその施設と経営とに助成を行つた。然し鮭鱒の蕃殖を阻害する各種の障害は年々増大するので孵化事業の実施方法も之に対応して整備拡充し且効率を大ならしむる必要を痛感し昭和九年と同十二年の二回に全道の民営孵化場を道営に一元化し更に昭和二十七年に之を挙げて国営にして現在に及んでおる。

勿論その効果は相当に期待され近來の北海道の鮭漁護は年間三百万尾内外の漁護を維持し得るようになった。

この孵化事業の向上発展の根本は効果的な技術によらねばならないことは云う迄もないが之に平行して忘るゝこと出来ないことはこの事業による受益者たる漁業者は勿論一般人が事業の本質を理解して協力を惜まぬことである。これを實現するために立ち上つたのは大正十三年に設立された北海道鮭鱒孵化事業研究会であり之が拡大されて北海道孵化事業協会に生長した。幸いにして関係者の共感を呼び次第に隆勢になり内容充実するに従い北海道鮭鱒保護協会となつて昭和十七年まで続いた。一方官営孵化事業への協力も単なる技術的、精神的ものでは充分でなく物心両面か

らの協力が必要となつて来たので北海道鮭鱒保護協力組合なる経済行為を伴う団体に発展し更にこれが北海道鮭鱒養殖水産組合として法人化されたが偶々終戦後に起た漁業制度改革により協同組合組織に変更するを余儀なくされ昭和二十四年に北海道鮭鱒漁業協同組合になり後これを拡大強化して北海道鮭鱒増殖漁業協同組合となつて現在に及んでおる。

斯く幾多の変遷を経たがその何時の時代にも一貫して目的とするのは孵化事業者の協力であることに変わりなくその一環である漁業者孵化事業関係者及一般人への呼びかけとして鮭鱒彙報なる機関誌の発行を継続しておる。そしてそれが本年五月で三十周年になつたのである。勿論三十年間には母体の変わり目による事務的事情、財政事情、原稿の集まり方の不円滑、戦争による影響等いろいろの原因で時に

休刊したこともあり合併号として辻褄を合せたこともあり幾多の曲折を経たが免に角三十年間持続し得たことはよるこびに堪へないし今後も一層の努力を払って継続して行くつもりである。

鮭鱒彙報なる雑誌はその名称の示す通り鮭鱒に関する学術、漁業、行政其他あらゆる部門に関する研究、試験、調査、通信から随筆、雑文の形で年間四回乃至五回発行の計画で発足したが已述の理由により発行予定も次第に乱れて来ておること、内容的に以前に比し低下しておることは汗顔の至であるがこれは今後極力是正して行かねばならぬ。今回は三十周年を迎へるに当り之を記念して既往の状況を回顧し併せて将来に備へたいと思ふのでその意味で彙報発行の年長を次に載せ尚附録として重なる記事の目録を添付する次第である。

### 鮭鱒彙報発行年表

(大正十三年より同十四年に至る間に孵化事業研究会より四回会報発行されてあるが之を省く。)

昭和	年次	発行			発行者	摘要
		卷(年)	号	月日		
四	一	一	四	一九七五	北海道鮭鱒孵化事業協会	

一〇	九	八	七	六	五
七	六	五	四	三	二
二七 二六	三一 二一	四三 二一	四三 二一	五四 三二	合 六五 四三 二一
九二	七四 一	七五 三一	七五 三一	〇八 五三 一	一 一七 五三 一
五 二二	三〇 三〇 一	三一 三一 三一 三〇	三一 三一 三〇 一五	— — — —	— — — —
北海道鮭鱒保護協会	同 前	同 前	同 前	同 前	同 前

三四	三三 三三 三一	三〇	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三
	休刊			休刊					
五七		五六	五五		五四	五三 五二	五一 五〇	四四 四三 四二 四一 四〇 三九	四四 四五 四六 四七
六		一一	五		一一	三一	九三	一	三
一		三〇	三一		三〇	三一 二〇	三〇 三一	三一	二八
同前		同前	北海道鮭鱒漁業協同組合	同前	同前	同前	北海道鮭鱒漁業協同組合	同前	同前
發刊三十周年記念号					解散記念号				

二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三	一二	一一
	休刊	休刊	休刊			休刊		一一	一〇	九	八
四四				四三	四二		四一 四〇	三九	三八 三七 三六 三五	三四 三三 三二 三一	三〇 二九 二八
二			六	五		一一	一四	一〇	一二 一〇 七三	一九 五二	九四 一
二五			一〇	三〇		一五	一	一	一五 三〇 一五 三一	三〇 一五 三一 五	三〇 二〇 三〇
同前	北海道鮭鱒養殖水産組合		同前	同前		同前	同前	北海道鮭鱒保護組合	同前	同前	同前
			組合解散記念号	当路孵化場創立五十周年記念号		虹別孵化場創立五十周年記念号		千歳孵化場創立五十周年記念号			

# 鮭 鱒 彙 報 と 私

岡 田 雋

私が鮭鱒彙報の編集に関係していたのは、数えて見ればもう二十年ばかりの昔になる。その頃と現在との間には、日本の世界大戦突入、そしてやがて惨めな敗戦と云う大きな社会的変動が横わつてい上に、私個人としては終戦後満洲で中共政府に八年間強制留用されると云う期間が介在して、今では当時の記憶はあら方模糊とした過去のヴェイルの彼方にかすんでしまつてゐる。

そこでこの機会に手もとにある古い鮭鱒彙報を探し出して記憶を呼び起すことにしたのだが、昭和十一年一月発行第二十八号の会報欄に、升田清、内海重左エ門、奥村清、菊地寛助、山本勝見の諸氏と一緒に、私が編集事務を委嘱されたことが載つてゐる。昭和十四年末、私は孵化場を辞して満鉄に転出したが、十五年四月発行第四十号の編集後記には、菊地寛助氏の筆になると思われる、私に対する面はゆい程の讃辞が見られる。して見ると十一年四月の第二十九号から十四年十月発行の第三十九号まで、年数にして約四年間、号数にして十一冊が、鮭鱒彙報と私の密接なつながりの期間であつたようだ。

X X X

それでも出来上つて来た雑誌を開いて見ると、必ず若干の誤植が発見されてがっかりしたものである。

表紙の体裁には毎号頭を悩ませたが、之には終に手がつけられなかつた。表紙は人間の顔のようなものだから、成るべく長い伝統を尊重しようと云う気持が働いてもいたが、旧殻を破ることの難しさを徒らに嘆じたに止まつて、その中とうとう諦めてしまつた。それでも内容の方は毎号少しづつでも改善して多少共スマートにしていつたつもりである。

もう一つの抱負は雑誌を厳格に定期発行することであつた。私は年四回発行を命ぜられていたが、発行日が不定では熱心な執筆者の支援を期待することは難しいと考えたので、発行予定日の一ヶ月前には原稿を全部揃えて場長の手もとに提出することにしてゐた。ところが当時私の半田場長に対する唯一不満は、いつだつて満足に発行日に間に合うように原稿の下つて来たことがないと云うことのようにあつた。

X X X

それでも殆ど全国の関係の学者や技術者に、厚顔しく依頼する原稿が順調に集まつて来て、原稿不足に悩んだことはなかつたように思う。当時原稿を貰つた先は、道内は勿論東大、京大、東北大その他各級の試験機関、遠くは朝鮮から頂いたこともある。又当時孵化場は研究発表の機関誌

本誌の編集は当時孵化場長をしておられた半田芳男先生から直接命令を受けたのだが、私は多少の抱負を持つて喜んでこの仕事をお受けして引き下つたように覚えてゐる。

本誌には以前から学術的に貴重な論文がちよいちよい掲載されて、一部人士の間には既にその存在が相当高く買われていたが、そう云つては差し障りがあるかも知れないが、雑誌の編集に何となく垢ぬけのしない泥臭いところが着きまつていたように感じた。例えば表紙の体裁からして野暮つたい印象を受けるし、内容の版組にしても誤植が多かつたり、太いゴジック字体をやたらに使つて見たり、時には一篇の論文が妙なところで中断されて、二号に跨つて掲載されると云う乱暴な編集もあつたようだ。之には勿論当時の編集者にいろいろ理由や都合もあつたことゝ思うが、苟くとも、ものを書く程の人には、印刷の出来上りを異常に気にする人が少くない。私は印刷のすつきりした誤植のない編集をやらなければ、とても良い原稿も集められないし雑誌の信用も高められなと考へていたので、校正の如きは今の升田水産課長や桜井水試釧路支場長、江口孵化場課長その他の諸氏と三校、四校と徹底的にやつた。

の如きものがなかつたので、極力場員の研究発表の場としても利用して貰つたつもりである。執筆者には既に大家に属する方々もあつたが、中堅級や新進気鋭の士も少なくなつた。現在学界官界に名を成している人々がこの中に少からずあることは、私に許された小やかな誇りと云つてよいであろう。又当時中央の学術雑誌に発表される論文の中に、ぼつぼつ本誌所載の論文が引用されるのを見て、ひとり快心の情を押えかねたと云つても大目に見て貰えるであらう。

然し又一方には本誌の使命が本来業界の啓蒙指導にあつて、本誌の在り方としては余りに高踏的ではないかと云う批判を耳にしないわけでもなかつた。確かに筋の通つた批判で一番耳に痛かつたが、学窓を出で二、三年の若輩にとつては業界の要求とか実態とかは皆目見当もつかなくなつたし、学界とか官界とかの間に本誌の信用と權威が認められれば、母体の鮭鱒保護協会の運営にも有利になり、ひいては業界に之が還元されるではないかと云うのが私の見解であつた。若し私の編集方針が不満なら場長が容赦なく職権を奪りあげるだろうぐらいに考へてゐた。今なら周囲から散々吊し上げを喰うところだが、半田場長は寛大にも何の啓蒙もせず、たゞ適当に舵をとつておられたようだ。

以上目慢めいたことを縷々書き綴つて、さぞ目障りな文章になつたことゝ思うが、事実今日まで自分は鮭鱒彙報に

対してこのくらいの貢献はしたと云う自負をひそかに温めていたのだ。ところが今度の機会に自分の編集した時期とその前後の雑誌を引き較べて、それ程際立つた差異の認められないのを目のあたりを見て、何とも汗顔の思いをしている。然しこんな不遜な記憶が残っているのも、それだけ当時私が本誌の編集に情熱を打ちこんでいたと云う証拠と見ることが来よう。

X

X

X

当時の世想をふりかえつて見ると、騒々しい程の活況の裏側には、いろいろな面で重苦しい希望のない空気がよどんでいたようだ。卑近な話が我々の職場でも昇格や昇給があるのかないのか、あつてもいつのことやらまことに希望のないスランプの時代であつた。今にして思えば、当時は国自体が大きなスランプを切り抜けるために、一かばちかの大博打を打つて、知らず／＼転落の淵に近づきつゝある時代であつたわけだ。街に出れば毎日のように出征軍人を送る軍歌のどよめきと旗の波。孵化場からもぼつぼつ応召する同僚が出はじめていた頃だ。

その波はやがて本誌の上にも押し寄せて来た。十三年三月発行第三十五号から、表紙裏面に国民精神総動員―拳国一致、尽忠報国、堅忍持久―と云う囲みが出ているが、之を今後毎号載せるように半田場長から指示のあつたのがその前触れであつた。然しこの程度ですむ筈がなくやがて用

紙制限の命令となり、せつ角年四回定期発行にこぎつけていた本誌にも、発行回数を減らさざるを得ない運命が待ちかまえていた。今でも場長からこの命令を伝えられた時の、何とも情けないやり切れない気持をおぼろげながら記憶している。

それからいくばくもなく私は満洲去つて、その後の本誌の様子は殆ど知るところがないが、戦中時後編集の任にあつた方々はさぞやり難かつたことだろうと想像される。

鮭鱒彙報と私との縁は、国が玉の緒のこと切れる寸前の輝きにも似た。上べだけの活気を見せていた時代に結ばれ、その運命の縮図を見るかのように、ぼつと燃え上つて呆気なく光芒褪せた線香煙火のそのの如きものであつたと云える。

X

X

X

いま鮭鱒孵化場には研究発表の機関誌として内外共に充実した孵化場研究報告が毎年一回発刊されているし、啓蒙指導の機関誌としては「魚と卵」が新鮮な感覚を盛つて年四回発行されている。殊に「魚と卵」の如きは、かつて私にその感覚の半分でもあつたらと嘆じさせる、気の利いた編集ぶりだ。

こんな雑誌を見なれている今の若い人達には、今も昔も一向に見栄えのしない薄つぺらな鮭鱒彙報に、かくも仰々しい回顧を寄せる私の気持を、奇異にも感じ又憫笑を催す

ことでもあろう。然し鮭鱒彙報はこの美事な子供を産むために多年苦勞して来たとも云えるのだ。そしてこの子供の産れるまでのつなぎの役割を、それでも可成りの程度まで果して来ているのだと云うことを知つて貰えれば私の意は達するのだ。

鮭鱒彙報は本年度で創刊以来三十周年を迎えると云う。本誌の現況は必ずしも盛運にあるとは云えないかも知れないが、過去に於て斯界に遺した貢献は多大である。その使命は今孵化場の二大誌が之を引き継いで益々盛運に向いつゝある。いわば本誌は功成の名遂げた功勞者にも比すべきであらう。願くは大方の諸君と共に敬意と愛情とを以つて深く本誌の長久を祈ることにしたい。

# 七十年前創立当時の 千歳孵化場

—その孵化能力に関して—

半田芳男

本道の鮭鱒孵化事業創始八十周年を迎へてその間に於ける事蹟を追想すれば万感交々至るの趣あるのが之に加へて我国の孵化事業のメッカとされた千歳孵化場は同時に創立七十周年を迎へると云うよろこびの二重奏となつた。これらに関する詳細の事柄は当面の鮭鱒孵化場及関係団体などによつて行はれる記念事業に於て採り上げらるゝであろうから筆者はこれには触れないが遇々本誌も発刊して三十周年に当るのでその記念号を編集することになつたのであれこれを考へた結果茲に千歳孵化場創設当時に関する記事を載せて祝意を表する次第である。

千歳孵化場の創始は明治十九年に、当時の道庁水産課長伊藤一隆氏が官命で渡米し各般の水産事情を調査し、翌二十年帰朝してその智囊から第一着手の事業として絞り出されたものはこの千歳孵化場の創立であり、之に参画輔佐したのは藤村信吉氏である。

使以來蕃殖保護の方法を設け種川は勿論一般に夜間の漁者と有害の漁具を使用するを禁する等の規則を設け尚重要な河川には看守人を配置し取締を為すと雖とも近來各河川の鮭魚年を追ひ減耗する証左既に顕然たりし蓋し旧土人若しくは移住民の無識なる鮭魚の減耗を毫も意とせず種川に於ても濫獲酷漁前途の如何を顧みるもの殆んど稀なり故に之が蕃殖を図るは到底規則のみに任すべからず況んや全道河川の数多なる仮令数百名の看守人を配置すと雖も素より看守人の周到を望むべきにあらず故に於て一步を進め法令の保護と共に人工孵化を行い以て積極的の増殖を図るの必要欠くべからざるを認む故に北海道庁に於ては曩に本会々頭伊藤一隆氏を米國に派して鮭魚人工繁殖の実況を探求せしめしに其良法は直に氏の齎す所となり昨廿一年胆振國千歳郡島柵舞村を相し爰に北米合衆國水産調査委員の所管なる「バックスポート」孵化場に模造せし一の孵化場を官設し之を中央孵化場とし実業に熟達せる技術者を置き完全の孵化器を備へ凡そ二百万粒を採卵し幌別、白老、錦多布、染退及三石の五川に簡易なる民設孵化場を設け中央孵化場に於て卵子の稍発眼の期に至りしものを民設孵化場へ凡廿万粒づつを分与し之を孵出して放流せしめ併て卵子運搬上の試験を成し残余凡そ百万粒は石狩支川に放つこの計画にして一兩年間其好結果を認め中央孵化場の事業を拡張し民設小孵化場の数を増し猶進んで全道をして若干の鮭魚蕃殖区域

藤村氏は事実上の千歳孵化場主任として仕事の実際に當られた。その計画を実施した第一歩の千歳孵化場の状況は北水協会報告第四十二号（明治二十二年一月十五日発行）に同氏の記事として載ておる。この雑誌は今日では稀本で容易に見ること出来ないの同好の士の為に此に紹介する次第である。尚本誌口絵の創立当時の千歳孵化場は、藤村信吉氏の筆になるもので、同じく右報告に載ておるのでそれを復写したものである。

## 千歳鮭魚人工孵化場

（北水協会）  
札幌会員 藤村信吉

鮭魚は北海道著名の物産にして明治廿年の産額十二万三千石余価格無慮七十二万四千円に下らず此の如き物産を永遠に保維するは当道に於て最も必要なりと言ふべし旧開拓を分ち毎区に中央孵化場と之に連絡する小孵化場を起し大に全道鮭魚の蕃殖を図らんと其筋にて計画せらるゝ由予幸に公務を以て該地に出張し親しく其室内の装置採卵の様等見ることを得たれば其景況を左に記す。

元來水の適否は孵化場の成否に就て直に議の決する処にして今該孵化所に引用せる水を見るに少しく隔たりし後方の小山より発し岸頭に高さ七尺余の落水をなして千歳本流に注さつゝありしか孵化場に引用するに當て両傍土塊の落ちて水の汚滓を来さざるか為め及び谿流を一所に集め其量を増さんが為稍遠方の処より板を以て溝となし孵化所を巨る二十間許の処に至て全く埋樋となし泥埃を沈殿せしめんが為に三ヶの沈殿所を設け其最も孵化所に遠さかれる者は石造の櫃にして水口に銅鋼の戸を備へたるは木葉など塵芥の流入を防がんか為にして尚雪の落入りて水温を変せんことを慮り板屋根を以て溝の全長を蔽いたる等最も注意を尽したり。

孵化所は河岸を距ること凡三十間許の処に於て南東に面し間口六間奥行八間の家屋を構へ別に東側に方二間半の事務所を建立せるか戸を開きて櫓子を下るときは則ち孵化室にして西の窓際に床より高凡五尺許の所に元樋を据付け水は一旦室の北隅にある溜樋に集りて「フランソール」の灑枠を通り此樋に流れ来り樋の横に設けある径一寸二分の短き管二十二ヶより孵化槽の中に注流する状実に奇観なり孵化槽

は長十二尺幅一尺(二尺を訂正してある)深さ七寸(追記して加へてある)にして最も新規の者に倣い其室内に排置せる在様は四本(六本を訂正してある)を一組となし内二本(三本を訂正してある)は直に元樋に接し他の二本(三本を訂正してある)は前者の下端に続て少しく下り据付たり僅か人の通行し得る大の間を以て又前の如く他の四本(六本を訂正してある)を排置し都合十一組(六組を訂正してある)に及び槽中は八つに区画して一区毎に方一尺の孵化盆十重ねを一枠にしたるを容る然して一枠(一槽の誤と思はるゝも訂正してない)には鮭卵十五万粒余を安排し得べければ該孵化所に於て卵の発眼期に至る迄養成し得る数は五百十九万粒(四千三百二十万粒を訂正してある)なり。(以下抹消してある文は「此外尚八本の孵化槽の旧き型に倣い砂石の上に排卵して孵化せしむる者あり去れば該孵化場に於て鮭卵を採り発眼の期に至らしむるを得べき数は四千八百万粒に下らざるべく孵化し得べき数は百万粒以上なるべし云々」とあつて卵数計等の基礎が不明確であることは遺憾である。最後に次の記事を添へて終ておる)本号巻首に掲ぐる処の図は即ち該孵化場なれば就て熟覽あるべし。

註 文中( )内は筆者の註でそれ以外は凡て原文の儘

以上の記事で創立当時の千歳孵化場の規模は一応瞭解出

る。従つて従来伝へられていた創立当時の収容力九百六十万粒もそのまゝ受け入れられないことになるわけである。

それで筆者は今一度千歳孵化場創立当時のことを書いてある文献も調べて見ることにした。即明治二十二、三年頃北水協会が編纂した北海道漁業志稿、同二十七年六月三十日道庁水産課発行の北海道鮭鱒人工孵化事業報告、同三十三年四月六日同水産課発行の千歳鮭鱒人工孵化事業報告等に就て調べて見ると明治二十一年十一月創立の千歳孵化場孵化室は前に紹介した藤村信吉氏の訂正記事と同一であるが唯一枠の収容卵数は一万六千粒とあつて該記事の十五万粒と著しく異つておる。勿論一万六千粒ならば正当であると認めてよいから之から計算すれば五百六十三万二千粒を収容出来のである(砂利槽を別として)。又北水協会報告明治二十三年三月十五日発行第四十四号に藤村氏は「千歳鮭魚人工孵化場の景況」なる記事を載せておるがその千歳孵化場の孵化室の構造を記して「もとより五百万粒を孵化し得べき構造なれば云々」とあることによつても五百万粒説が正しいと言へる。

然らば従来伝へられておる九百六十万粒説はどうであるか。これは明治二十二年秋(創立の翌年)に第二孵化室として三十坪(三十五坪と書いてあるものもある)を増設しウキリアムソン式孵化器を使用したのでこの分を合せて九百六十万粒となるのである。

来る。唯口絵図面の孵化器配置は二間槽六本一組で六組、その外に八本の砂利床孵化槽があるのだが以上記事の訂正によつて実際は二間槽四本一組で十一組で始められたことがわかる。次にこの孵化槽の卵収容力の点であるが一槽は八つに区画され各区に方一尺の孵化盆十枚重ねを一枠として収めるとある。即十一組四十四槽で合計三百五十二枠であるが前記事によれば一枠に鮭卵十五万粒余を収容出来るとある。これは明かに誤と思はるゝ。事実これで四千三百二十万粒収容を五百十九万粒と訂正はしてある。それにしては仮に一枠十五万粒とすれば合計五千二百八十万粒と云う莫大の数になるのである。そこで一枠十五万粒は一万五千粒の誤であるとすればこの合計は五百二十八万粒となり前記事の訂正数字五百十九万粒に略々近くなるのみならず五百二十八万粒と五百十九万粒とが書き違ひでないかと思はるゝ節がある。斯様に考へればこの創設当時の孵化能力は五百二十八万粒で外に砂利床槽八本で一百万粒(一槽十二万五千粒)として計算し総計六百二十八万粒が当時の収容力と考へてよいと思う。一方孵化室の面積を検討して見ると間口六間に奥行八間とある。即四十八坪の面積であつて然も用水落差から見ても優に一千万粒収容するだけの孵化槽を配置出来るものであるが、四千万粒から五千万粒の収容力は絶対に考へられないから矢張り前記の五百万粒から六百万粒程度の収容力との計算が正鵠を得たものと思

以上管々しく書いたがこれで千歳孵化場の創設時は五百万粒乃至六百万粒の孵化設備であつたし第二年に増設して九百六十万粒の孵化設備となつたことが明かになつた次第である。

(三四、四、三〇記)

## 養殖とは何ぞや

御名神 岳 史

水産は、「漁撈、製造、養殖」の三部門によつて構成される。などこと改めて言おうものなら、「なに言つてんだ、そんなことぐらゐ小学生でも判つてゐる。」と頭ごなしにがなされてしまふ。

然し、「漁撈、製造、養殖」の三部門をどのように運用することが、水産を成立させる要素となるか。というテーマで公聴会でもやつたならばどうであろう。

一般の関心が、ソレ北洋だ、ヤレ南氷洋だと勇壮果敢な遠洋出漁に傾倒している点より見て、

「漁撈なくて水産は成立つものではない、何をさておいても獲ることが先決問題だ。」

「製造は漁撈につきものだが獲らないことには話になるまじ。」

「海や川にはウヨウヨしてゐるぢやないか、資源は無尽蔵さ、いくら獲つたつて獲りきれぬもんぢやない、ヂャンヂャン獲つて、罐詰でも塩蔵でも干物でも、何でもよいから造つてさえおれば水産は減びることは絶対ないさ。」

「魚や海藻なんかすぐ殖えるもんだ、いよいよ獲る物が

なくなつてから増殖したつて充分間に合うだろう。」

といつた。タコの脚が独りでに生えたり、土手カボチャや裏成スイカがそこらにゴロゴロしているような誇大妄想的な迷論がとび出さぬでもない。食うことだけが天与の総てと心得ていた原世紀人ならば、我が意を得たりとばかりヤンヤの拍手喝采をおくるところであろうが、果してポウフラがわく如く、いとも簡単に資源が殖えるものであろうか、これでは水産を成立させる要素どころか、原爆的要素を力説しているようなものである。

では、水産の成立を育成する要素、つまり、運用術とは如何なるものであるかというに、今更クドクド論ずるまでもなく、それは「養殖—漁撈—製造」の行程を経ることである。「殖す—獲る—造る」、即ち、「殖すべきものを殖し、然る後獲るべきものは獲つて加工に廻す」、この論理がソレコソ「小学生でも判つてゐる」ようにならなくては、

「養殖は獲る物がなくなつてからでも間に合うもの」という「迷論」が「名論」の如く誤信されがちとなる。

さて、タコの脚が生えたり、カボチャが出たり、はたま

た、ポウフラがわいたり、仲々多彩にわたつた水産運用術も漸く纏まつたところで、ソロソロ本筋に入ることにする。大自然の息吹と共に生きていた原世紀時代の海洋、河川湖沼には、絢爛さながらの宝庫が惜気もなく解放されたことであろう。空服になるとノコノコ出かけて手当り次第獲つて食べ、満腹になるとソツポを向いて匂も嗅まぬ所謂、放牧馬的な自適三味の生活が原始人によつて営まれていたとするならば、当時の生活こそまことに天下泰平というより外ない。然し、その反面、獲物の貯蔵も知らない、

というよりも、必要としなかつた「天高く馬肥ゆる」の明け暮れであつてみれば、一たび暴風雨に見舞はれたとするとこれ程惨めなものではなかつたらう。地軸をも揺がさんばかりの怒濤、山岳をも一呑せんとする濁流より身を守り、野良犬の如くウロチヨロとフラツキ歩いて、仲々求める食にはありつけず、餓死寸前の苦悩をサンザン味合はされたこととは言うまでもあるまい。そのような難辛苦を嘗させられて漸く獲物の貯蔵法が生み出されたのである。野性動物を真似て土中に埋めおく程度の極くチャチな方法から始められた貯蔵ではあるが、技術は日進月歩、やがて加工術を会得してからというものは、入用であろうがなからうがそんなことはおかまいなし、口に入るものなら何でも御座れ

で、ムチャクチャな獲りかたを始めたものであるから天罰観面、そのむくいはベンペン草でも生え出しそう凶荒の

兆となつて現れたのである。いかなる放牧馬族でも自分の宝庫にベンペン草が生え出したとあつてはノホホンとしてはおられまい。「ごくつぶし」觀念から脱却してアアでもない、コウでもないと思考をめぐらし、やがてのことに、食わんがためには畑の人手れが肝心だという絶対的不可欠原理をつかみとつたのである。かくして、漁撈—製造に次いで脚光を浴びた養殖ではあるが、漁撈、製造の華やかさに較べなんとジミナ存在であろう。

養殖も初めのうちは、凸凹路を歩くハイヒールの如きヨタヨタ式や、権兵衛の種蒔きのようなモタモタ式でなんとか曲りなりにも事は済まされたであろうが、科学の発達めざましき現世では、優秀漁具の出現にマツチして漁撈技術はグングン向上する、それに加えて、重要化学工業の発展や鉱山の開発によつて吐き出される有難迷惑な有害排泄物は河川を汚濁する、水力発電所や灌漑用水取入のために築設されるダムとか堰堤は魚類の溯上を妨害する。また、森林の濫伐は雨の都度洪水を持参する。その外密漁者、つまり、「資源泥棒」による掠奪など、枚挙にいとまもない程の大きな障害にデンと御輿を据えられては、もはやハイヒールや権兵衛のヨタモタ法で種族の激減を食止めることは不可能である。

歴大な資金による培養施設、達識炯眼のオーソリテイ陣による大々的な研究、それに実務担当隊の苛烈極まりない



即ち、蕃殖を大別して養殖と保護の二つに分類することが出来る。

一般的には、蕃殖と養殖は同じ論旨として取扱はれていくようなのであるが、学術的な難しい論旨からゆくと、養殖は蕃殖の構成分子ということになる。

この養殖と保護はどのようなものかというに、人為的に孵化或は移殖などを行つて種族の持続を図ろうとする積極的行為を養殖、法令による庇護とか障害物の除去或は害敵の防禦などを行つて種族の持続を図ろうとする消極的側面行為を保護といつている。

養殖は、種苗の自給と種苗の移入、保護は、捕獲の制限と棲息所の庇護を完成すると共に、両法均衡してはじめて水産資源の維持は全うされるのであつて、そのいずれかを継子扱いするようなことがあつても破綻の宣告を回避することは至難である。

いよいよ「養殖とは何ぞや」も大詰めに近づいて来たようである。

種苗の自給、移入、捕獲の制限、棲息所の庇護などはどのようにして行はれているか、ポツポツその片鱗に触れて最後の締め括りに入ることにする。

種苗の自給でいう孵育は、人工受精孵化によつて種苗を生産することである。この中には適当の時期に河川を経て海岸に放流される「さけ」「ます」、沿岸から自然放流さ

然産卵孵出し、稚魚になつて河川に浜上する「しらすうなぎ」を川口附近で獲り揚げ池中放養するのがそれである。

右の外に移殖というのがあるが、これは孵育或は飼育などによつて生産された種苗を遠隔の地に移して育うときはいはれるのであつて、第一次行為だけを云々するならば種苗の移入ということになるが、第二次行為の目的が種苗の自給におかれていた点よりいうと、孵育若しくは飼育に包含するのが順当のようでもある。この移殖の主なるものに支笏湖より十和田湖に移した「ひめます」、北米より移入した「にじます」などがあるが、この外貝類、藻類などあらゆるものに行はれる。

次は保護に移るが、捕獲の制限という時期、場所、方法適令は、完全な産卵と稚魚の安全を図るために設けられた法則であつて、これには、産卵期の前後にわたつて特定種族を禁漁する(例、「あゆ」自四月一日至六月三十日及び自九月一日至十月三十一日、「あわび」自七月十六日至九月二十日、「なまこ」自五月一日至七月十日)、指定区域を制定してこの区域内における操業を禁止する(既設数河川七十一ヶ処、湖沼三ヶ処)、使用漁具の規格を限定して稚魚、稚貝の混獲を防止する)「わかさぎ」「しらうお」「こうなぎ」「ごり」「えび」「いさだ」「しおむし」のモジ網禁止。爪の間隙八種以上の「ほつきがい」桁網、同八・五種若しくは十一種以上「地域別」の「はたてがい」

れる「にしん」「すけそう」、湖中に放養される「ひめます」、池中に放養される「にじます」などが含まれていく。

一方の飼育は、産卵床だけは人工作成するが産卵受精は天然の状態に委ねて種苗を生産することである。「こい」「きんぎよ」などがこれであるが、この方法で生産された種苗は殆んど内水面放養に向けられるものが多い。なお飼育には、その種族によつて流水式と止水式の二方法がある。流水式飼育には「ます」類(孵育によつて生産されたもの)、止水式飼育には「こい」「きんぎよ」などが適している。また、比較的狭い場所において資本と労力を集中して短期間で利益を得る方法を、集約的飼育といふ、あまり資本と労力を消耗せず広大な場所において長期間かゝつて利益を得る方法を、疎放的飼育といつている。前者は池中における投餌飼育のことであり、後者は湖沼、貯水地(人造湖)などにおける天然餌料による飼育のことである。

次の、種苗の移入でいう移育は、度い意義では或は飼育中に含まれる性質のものであるが、前二者の孵育及び飼育は共に人工孵化、即ち、自給自足によつて種苗を養育する方法であるのに反し、移育は天然に生産される種苗を回収して養育する方法で、増肉のみを主眼とするのであるから根本的に論議するときは飼育と異にするのが妥当のようである。この具体的例に「うなぎ」がある。深海において天

桁網、網目の大きさ七・五種以上の「なまこ」桁網、同四十五・五種以上の「たらばかに」刺網、同三十四種以上の「はなさきかに」刺網による以外の小規格漁具使用の禁止。爆発物、有毒物或は電流を使用しての捕獲禁止、特定魚貝類に対しては大きさによつて制限する(「さけ」全長十八種未満、「ます」全長十二種未満、「にしん」全長十種未満、「あわび」殻長七・五種未満、「ほつきがい」殻長七・五種未満、「はたてがい」殻長八・二種或は十六種未満「地域別」の採捕禁止)などの制限がある。(註「括弧内の例規は総て北海道におけるものを適用する」)

次の棲息所の庇護は、種族を維持するため産卵、種苗発生若しくは棲息に必要な諸施設を行う間接的行為をいうのであつて、遡河魚族(「さけ」「ます」「あゆ」など)のため障害となる堰堤、瀑布などに魚道を設け、上流産卵床への浜上を容易にする施設(主として魚梯が用いられる)重要海藻或は貝類の種苗発生または棲息に障害となる雑藻その他を駆除する、即ち、磯を掃除する行為、着生床のない砂礫地帯或は磯掃除困難なヶ処に対する投石若しくはコンクリート盤作成、好蔭性魚貝類(磯付魚「あわび」「なまこ」「えび」など)及び海藻類の群棲所となる築磯(石築、舟築、棹築、コンクリート築など)の作成、好蔭性魚族の安棲所、洪水予防或は天然餌料の発生などのために行う海岸、沿川、湖沼、水源池周辺の魚付林(樹木)の植林

河川中に放捨流出される工場または鉱山の廢液、排泄物に因る水質汚濁の防止対策などがこの庇護に入る。

以上が「養殖とは何ぞや」の概念であるが、いつまでも白痴のウワ言じみた駄文を書きつらねていたんでは、「オイ、コラ、そんなクダラン三文、否、ゼロ文学いつまでやつてるんだ、いゝ加減やめんか!」と、この貴重な機關誌閣下に呷鳴られそうである。このへんで大方の養殖に対する再認識と、「養殖とは念仏に非ず、口で唱えるよりも先ず実行」の実践躬行を強く念願しつつ、「養殖とは何ぞや」の幕を閉ぢることにする。

(一九五七・八)

## 彙報

### ○十勝孵化場創立六十周年記念式典

現北海道さけ、ます孵化場十勝支場は今を去る六十三年前に極めて簡易なる設備で創立されたが間もなく災害により被害を受け僅か一年にて廃止されたので地元漁業者は之を遺憾とし明治三十二年帯広市外の湧水を利用して四百万粒孵化の設備を以て正規の孵化場を創立した。その後一千万粒の収容力に拡大されたが昭和四年に製糖工場の廢水に基く被害にて収容の全孵化稚魚五百万尾全

外のチカ、ワカサギ等の小形魚を容易に上流に通過せしめこれを漁獲する漁業者の操業を利することも可能となつた。

この施設は従来各地に用いらるゝ木製のものや竹簧よりも高価であるが保存に注意すれば連年使用し得るので結局経済的である。

本施設は斯業の改良に有効なりと認められ北水協会に於てその製作費に対し助成された。

## 鮭 増協通信

才六  
五月一日

### ○本組合長の更迭

組合創立以来組合長として尽瘁された林 好次氏は数年前より健康勝れず療養にとめられたが今後尚静養を要するので本年五月任期満了を機会に勇退されたのでその後任として之亦創立当時よりの副組合長半田芳男氏が総会に於て満場一致で選任された。

### ○第七回総会の概況

組合創立して八周年に当る本年五月三十日第七回通常総会が札幌市水産会館で開催された。出席組合員数一六九名(内委任状出席七三名)、午前十時半開会し林組合長

減の悲運に遇つたので大正村に移転し漸く其処を得て来順調に事業を実施し然も年々事業分量の増加を見現在の収容力は三千八十万粒、外に附属する十勝川水系の孵化場二ヶ所で三千八百万粒、合計六千九百六十万粒で全道第一の孵化能力を有しておる。

願れば初期には度々の困難に遭遇したが之にひるまじ官民協力一致して今日に及んだもので恰も六十周年を迎へることになつたので昨年十一月二十五日これを記念する式典を挙行し往事を回顧し今後に処する覚悟を新にした。

### ○鮭親魚捕獲用魚止柵の改良

河川を横断して魚止を用ふことは親魚捕獲装置として極めて重要あることであるが増水、流下物に対する処置、鮭鱒以外の小形魚の浜上通路等について困難なる問題を併い勝ちである。そこでこの調整を図るために鮭鱒孵化場の指導のもとに研究を行つて来たが漸く改善方法の目度がついたので之を昨秋網走川に於て試用し或程度の効果を収むること出来た。即魚止を鉄製格子とし必要の場合には下部より上に引き上げて格子に停帯する流下物を下流に流失せしめ得る装置とし水の流通をよくして魚止柵は勿論兩岸の護岸の保持を強化し得た又鉄製格子は強固なる鉄棒であるため格子の間隔は一定し鮭鱒以

に代て半田副組合長の挨拶(その要旨は後記しあり)の後議事に入り三十三年度事業報告、次いで議案審議に移り三十三年度決算、剰余金処分案の承認を求めた。次いで三十四年度関係議案を左に示す通り漸く議了した。

(1) 三十四年度事業計画は前年通り水産孵化場よりも親魚捕獲採卵の受託、密漁防止等を行い販売事業としては組合生産物及孵化場払下の採卵用の鮭鱒親魚合計二四九、四〇〇尾、金額五五、六七八、〇〇〇円の予定である。教育事業としては鮭鱒彙報を不定期に発行する。孵化場に対する協力事業としては例年の通り親魚売却収入より一定の単価を以て計算した金額を支出するものとする。

収支計画は収入予想七〇、四一八、〇〇〇円、支出予想六八、七八九、〇〇〇円(協力金一千一百余万円を含む)差引残一、六二九、〇〇〇円の見込である。

○ 組合員負担金賦課徴収に就ては前年通り全道の鮭鱒定置漁業者より一、〇〇〇、〇〇〇円を予定し特融償還の一部に充てる。(本件に関し出席者より鮭鱒を漁獲する小定置漁業へも賦課すべしとの意見あつた)。

○ 定款の一部変更については総会期日六月を五月又は六月と変更することになつた。

### ○役員を選挙

役員全員が満期となつたので之が改選を行い本誌表紙裏

側記載の通り決定した。

○ 総会に於ける半田副組合長の挨拶の一部要旨

(前略) 本組合は今を去る八年前即昭和二十六年に設立されたがその遙か以前より鮭鱒を増殖して漁業経営を健全化するために漁業者が協力して孵化事業を自ら行ふか或は道又は国の孵化場に協力するための団体を組織しておつた。その後効果を更に確保するために全道を一元とする協同組合組織にした。それが本組合である。その組合協力事業の第一歩は本組合が農林漁業特別資金一億円の融通を受けて孵化施設の規模一億粒の拡張を行いそれを国营孵化場の使用に提供した。これによつて国营孵化場の設備は約四億粒以上に増大したことになつたが時恰も三十三年度は採卵数五億六千余万粒に達すると云う未曾有の盛況を示したが収容力増大が成ておることによりこの大量の卵子を安全に孵化放流することが出来た。

その他孵化事業逐行上の物的協力として年々相当額を孵化場経費としており協力して過去七年間に合計約九千四百余万円に達し本組合の事業収入合計約四億余円に対しその約二四％に相当するもので組合財政は今尚赤字であるがこれを堪え忍んで実行しておる状態である。

次に国营孵化場が予算関係で必要な計画を完全に実行し得ない部分に対する協力であるがこれは主として親魚採卵の技術的協力である。これを過去七ヶ年間に於

て孵化場からの委託により実施した成績は年により消長あるが年平均で比較すれば全道の親魚獲に対し鮭は二六・〇％―五〇・〇％、桜鱒は一・五％―二五・〇％、樺太鱒は一九・五％―四四・三％、又全採卵数に対し鮭は二九・〇％―四七・九％、桜鱒は〇・七％―二五・七％、樺太鱒は一・二・七％―三九・五％で全道総数に対し相当の比重を占めておることが窺はれる。

本組合は水産業協同組合法によつて設立された業種別協同組合であるがその主たる目的は鮭鱒資源増殖にあるので組合員との経済的つながりは薄い嫌があるが然し資源が増殖確保されたならばこれが組合員に対する最高のサービスとなるのでこの見地から今後一層の努力を惜しまない覚悟である。(後略)

創刊三十周年記念才五十七号附録

昭和三十四年六月一日

## 鮭 鱒 彙 報 総 目 録

自 第一号  
至 第五十七号

北海道鮭鱒増殖漁業協同組合

# 凡 例

- 一、本誌は昭和四年五月に創刊して以来昭和十年二月に巻を改めて年次とし号数を創刊号より通算し第七年第二十六号として将来この休載を踏襲したが昭和十七年五月三十日の発行より年次を冠することをやめ単に号を表はすこととして現在に至っておる。
- 二、本誌は大別して論文篇と彙報篇との二部とし論文篇には論説、論叢、資料、講演、講義、抄録等の諸欄に掲載されたものを収録した。
- 三、以上の他のものは彙報篇に収め時報、趣味、雑文、写真等に類別した。
- 四、排列の方法は発表者氏名（又は発表機関名）のABC順に従つたが時報の分は発表号数の順によつた。
- 五、発表者氏名（又は発表機関名）の次に発表年次、題名、巻（又は年）、号数の順に記載した。
- 六、二以上の号数を合併発行したものには号数の上に合と記した。
- 六、発表機関の事務報告事項（会報、会告等）は全部省略した。

## ● 論 文 篇

発 表 者	年 次	題	名	年 卷	号
青 山 吟 三 郎	六	西別孵化場鑿井工事に就て		三	二
青 木 廉	一 二	鮭卵の吸水現象に関する二、三の観察		九	三 三
赤 根 金 太 郎	一 三	民間池中養鱒事業の実例		〇	三 五
千 葉 卓 夫	一 三	尾幌川の鮭鱒孵化成績と親魚遡上時の水質に就て		〇	三 八
江 口 秀 雄	二 五	鱒と糸蟲に就て		二	二、三
江 口 弘	二 五	養魚池の浮游性藍藻類が水質及び魚類に及ぼす影響に就て		三	五 〇
江 田 口	六	サケの寄生蟲と洄游問題		三	一
藤 田 経 信	六	北米合衆国の五ヶ年計画の水産大拡張案 鱒類の精卵		三	四



越能野中中	並	元	御	三	柴	阿	道	前	小	駒	越	
智島田野村	木	田	名	原	田	部	上	田	久	井	田	
通正信宗一	延	田	神	健	幸	莊	永	敬	清	治	秀	
秋一茂治雄	郎	茂	史	夫	郎	吉	吉	郎	治	卓	包	
一八	一二	二二	二二	二二	一五	一三	一二	一六	一〇	一一	一九	
鮭皮糝製法	ワカサギとチカとの差異に就て	人と魚との連鎖虹鱒のホネマガリと輓近の佝僂病研究の趨勢に就て	菊地氏の「鮭鱒天然孵化について」を讀みて	木崎鱒幼魚の鱗発生に就て	楊子江流域に於ける淡水魚の養殖事業に就て(上、下)	楊子江流域の淡水魚(上、中、下)	十勝孵化場に於ける移殖鮭の洞掃	北海道湖沼案内(上、中、下)	手製の観測器具二、三	養殖とは何ぞや	統計から見た鮭の洞掃に就て(石狩川)	鮭鱒の洞游経路について
一五〇九	六	一〇	一〇	九	四	一〇	九	八	七	六	一	九
合	合	合	合	合	合	合	合	合	合	合	合	合
三三	三一	五一	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四
三六	三一	五一	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四	四四

近小	小	小	桑	久	久	木	岸
藤石	林	林	山	保	保	村	田
賢季	教	久	達	伊	津	鉦	敏
蔵一	司	雄	覚	郎	男	郎	明
一七	一一	一一	一〇	一〇	一七	一六	一三
ウルモベツ湖へ鮭洞掃す	大沼の養殖事業	北海道鮭鱒孵化事業奨励の成績	鮭鱒稚魚の壮行会の開催	北見地方の鮭鱒孵化事業に対する障害	鮭鱒稚魚の豊平川移殖試験	虹鱒の重圧に対する抵抗試験	阿寒湖の公魚
八二	八八	七七	四三	〇八	一	一	一
合	合	合	合	合	合	合	合
四二	二九	一	二	二	二	二	二
二九	一	二	二	二	二	二	二





<p>孵化場鮭親魚捕獲採卵状況 民営孵化場の新設増設並に改造 第三回鮭鮭孵化技術練習生募集 播かぬ種子は生ぬぬ 孵化場鮭鮭親魚捕獲採卵状況 民営孵化場の拡張</p> <p>朱太孵化場産鮭卵滋賀外二県に移殖す 鮭及樺太鮭卵無償配布 孵化場鮭鮭親魚捕獲採卵状況 昭和四年度第一期及第二期鮭鮭漁獲高 米国産「クラッピー」蓴菜沼に移殖 四年度鮭及鮭孵化並に移殖 四年度鮭鮭孵化事業実習生 孵化事業報告に関する注意 道内孵化場鮭親魚捕獲採卵状況 鮭種卵配付 水産奨励金下付出願と請求に付いて 北海製糖会社工場の廃液による十勝鮭鮭孵化場の被害 鮭回帰の実例 阿寒湖の鮭移殖成功す 露国産白「ます」の大沼洞爺湖移殖 鮭及虹鮭種卵分譲 虹鮭種卵配付 道内孵化場鮭親魚捕獲採卵状況</p>	<p>三</p>	<p>二</p>	<p>一</p>	<p>四</p>
<p>三</p>	<p>四</p>	<p>三</p>	<p>二</p>	<p>一</p>

<p>鮭鮭孵化事業打合せ 鮭鮭孵化事業実習生養成終了 北海道庁孵化場担当区域変更 鮭鮭孵化事業協議会 霞ヶ浦産鮭 本年度孵化場鮭鮭親魚捕獲採卵状況 支笏湖の鮭鮭 摩周湖の虹鮭 「クロー・フイツシュ」(淡水大蝦)移殖 第四回鮭鮭孵化技術練習生募集 本年度孵化場鮭鮭親魚捕獲採卵状況 支笏湖の鮭鮭 昭和五年度第一期、第二期鮭鮭漁獲高 鮭卵卵膜病発生 水産奨励金下付状況 支笏湖及然別沼に米国産河鮭の移殖 鮭回帰率の面白き実例 道内孵化場鮭親魚捕獲採卵状況 昭和五年度鮭鮭漁獲高 孵化場鮭親魚捕獲採卵成績 虹鮭種卵配付 孵化事業実習生養成終了 昭和五年度鮭鮭漁獲高 鮭鮭孵化事業協議会</p>	<p>三</p>	<p>二</p>	<p>一</p>	<p>四</p>
<p>三</p>	<p>四</p>	<p>三</p>	<p>二</p>	<p>一</p>

本年度孵化場鮭鱒親魚捕獲採卵状況 樺太鮭石狩川移植試験結果 孵化場新設許可 鮭親魚の利用試験 昭和六年度鮭鱒親魚捕獲採卵状況 大沼にて肥大せる虹鱒を漁獲す 保護河川の追加 昭和六年本道鮭鱒漁獲高 昭和六年度鮭親魚捕獲採卵成績 保護河川湖沼の指定 官営孵化場事業打合会 鮭鱒種卵配付状況 昭和六年度本道鮭鱒孵化事業成績 昭和六年度鮭人工孵化事業調 昭和六年度鮭人工孵化事業調 七年度鮭親魚捕獲採卵状況 孵化事業許可 鮭化事業補助 鮭、時不知漁況 鮭類飼育成績 鮭鱒孵化事業補助金決定 道会議員有志千歳孵化場採卵場視察 胆振水産会孵化事業開始二十周年記念祝賀会	五	四	三	二	一
--	---	---	---	---	---

昭和七年鮭孵化事業成績 昭和七年鮭採卵成績 昭和七年度鮭鱒漁獲高 光栄の虹鱒 谷茂平氏の表彰 北千島鮭鱒流編漁業許可 鮭稚魚の放流方法 官営孵化場事業打合会 摩周湖に於ける虹鱒採卵成績 湖沼養殖協議会 全国河川湖沼養殖研究会 孵化事業経営者協議会 鮭鱒人工孵化場設置許可 鮭鱒孵化事業官営実現近かるべし 本年度の鮭漁況 昭和八年度鮭鱒捕獲採卵成績（十一月末日現在） 昭和八年度鮭鱒採卵成績 北千島鮭鱒流網漁業に対する沿岸漁業関係者の対策 石狩川後期鮭採卵試験 孵化実習生の入場許可 鮭類種卵分与 北千島合同漁業株式会社創立さる 西別孵化場の改称 鮭漁獲高	五	四	三	二	一
--	---	---	---	---	---

北海道鮭鱒保護協会  
以下同

鮭 獲 高  
移管孵化場勤務者氏名  
北千島紅鮭人工孵化施設  
昭和八年度全道鮭親魚捕獲採卵成績  
種 卵 分 与  
鮭類飼育成績  
鮭鱒孵化事業補助一覽表  
孵化事業經營者の異動  
洞爺湖の姫鮭親魚の小形  
緋鮭の移殖  
湧別孵化場創立十周年及国営移管記念式  
鮭鱒孵化場の陳客愈々整う  
全道湖沼養殖研究会  
昭和八年度本道孵化事業成績  
摩周湖に於ける虹鮭採卵成績附種卵分与  
鮭の産 額  
北洋に於ける鮭鱒の標識放流  
鮭鱒孵化事業状況  
千歳孵化場の盛況  
種 卵 分 与  
石狩川下流鮭親魚の採卵  
親魚捕獲委託事務打合せ  
北千島鮭鱒産額  
孵化事業官営移管祝賀会

六

二

七

二六

三

昭和九年度鮭人工孵化事業成績  
昭和九年度鮭人工孵化事業成績  
鮭の産 額  
河鮭種卵の配給  
第三回全道湖沼養殖研究会  
全道湖沼養殖研究会の本会加入  
本道沖合の鮭鱒漁獲状況  
昭和十年度北千島鮭鱒漁業成績  
標識鮭の再捕  
昭和十年度鮭孵化事業概況  
昭和十年度鮭孵化事業概況  
昭和十年度民営鮭孵化事業概況  
昭和十年度民営鮭孵化事業概況  
支笏湖姫鮭親魚の減少  
網走孵化場の公開と親魚廉売  
昭和十年度鮭親魚捕獲採卵成績  
虹鮭種卵分与  
北海道鮭鱒孵化試験成績概報  
北海道養鮭組合の設立  
北海道湖沼養殖研究会の開催  
民営孵化事業成績  
北海道鮭鱒孵化場の移転  
北海道鮭鱒孵化場採卵成績

八

二八

二九

三〇

三一

二七

山本勝見氏近く 試験成績概報	三二
鮭鱒孵化事業成績 電燈利用検卵検野鼠除法	三三
北海道鮭鱒孵化場移行式 支笏湖保勝会の創立	三四
北海道鮭鱒孵化場の拡張	三五
昭和十二年度鮭採卵成績（十月末日現在） 昭和十二年度鱒採卵成績（十月末日現在）	九
択捉島鮭漁況	
北海道養鱒業者調	
北千島占守島に於ける孵化場適地調査	
姫鱒種卵分与	
鮭鱒孵化場の陣容完成	
昭和十二年度鮭採卵成績（一月末日現在） 昭和十二年度鱒採卵成績（一月末日現在）	
北千島鮭鱒漁業合同問題	
鮭卵の布上孵化法	
淡水魚に付けた標識の影響	
本道の鮎の分布	
昭和十二年度鮭親魚捕獲採卵成績 昭和十二年度鱒親魚捕獲採卵成績	

昭和十二年度姫鱒孵化成績 昭和十三年度北海道鮭鱒孵化事業方案概要	一〇
鮭鱒族魚類生態の連絡研究会 北海道北見国で捕れた鮎	三七
鮭鱒の生態的研究連絡打合せ 北海道樺太両庁水産事務協議会の開催	三八
昭和十三年度鮭親魚捕獲採卵成績 昭和十三年度鱒親魚捕獲採卵成績	三九
支笏湖姫鱒の採卵状況 択捉島鮭漁況	四〇
北海道鮭鱒保護組合設立せらる	四一
昭和十三年度鮭親魚捕獲採卵成績 昭和十二年度鮎漁獲高調	
昭和十四年度北海道鮭鱒孵化事業方案概要 虹鱒種卵分譲	
昭和十四年度鮭親魚捕獲採卵成績 昭和十四年度鱒親魚捕獲採卵成績	
昭和十三年度鮎漁獲高調	
北海道鮭鱒保護組合の事業	
昭和十四年度鮭鱒漁獲高調	
昭和十五年度鮭鱒親魚捕獲採卵成績 昭和十六年度（十一月卅日）現在鮭鱒親魚捕獲採卵成績	
北海道鮭鱒孵化場の改称	

著者	年次	題名	年卷	号
秋味三平	二五	人間の出汗	二	合 五〇七六五
半田芳男	二五	得撫島雑記		合 五〇七六五
生仏	二三	鮭の唄き		四四四
御名神岳史	二五	我輩は鮭の子である		五〇七六五
〃〃	二六	十勝川の鮭を見て歩記		五〇七六五
〃〃	二七	鮭親魚販売記		五〇七六五
齊藤珠川	一八	孵化の恵み		四三
〃〃	一五	水界漫筆		二六
〃〃	一〇	鹹淡往来		二六

● 趣 味

北海道鮭鱒増殖漁業協同組合  
以下同

北海道水産孵化場虹別支場創立六十周年記念式典の概況  
北海道水産部長の更迭  
北海道水産孵化場十勝支場モデル孵化室落成式典の概況  
鮭卵三千万粒採卵祝賀懇談会概況  
十勝支場モデル孵化室落成式典の概況  
鮭卵三千万粒採卵祝賀懇談会概況  
北海道内水面漁場管理委員会の概況について  
流網技跡を有する樺太鱒の調査結果  
鮭鱒孵化場移管二十周年記念座談会（記事は附録にあり）

五二  
五三  
五三  
五三  
五三  
五三  
五三  
五三

北海道水産孵化場支場移転と事業場の廃止	四二
鮭鱒保護組合の改組	
鮭鱒稚魚愛護組合の誕生	
北海道養魚組合聯合会の誕生	
昭和十七年度鮭親魚捕獲採卵成績表	
昭和十七年度鮭親魚捕獲採卵成績表	
十勝支場昇格	
白人事業場に昇格	
十勝支場新装成る	四三
北海道水産孵化場移庁十周年記念式典の概況	
昭和十八年度以降同二十一年度に至る鮭、鱒親魚捕獲採卵成績表 (一) (二) (三) (四) (五) (六) (七) (八)	四四 四四 四四 四六 四五
北海道水産孵化場十勝支場創立五十周年記念式典の概況	
北海道養魚株式会社設立	四四 四八
北海道鮭鱒養殖水産組合の解散	
北海道鮭鱒漁業協同組合の設立	
昭和二十二年二十三年度鮭鱒親魚捕獲採卵成績表 (一) (二) (三) (四)	五〇
北海道水産孵化場千歳支場創立六十周年記念祝典の概況	
十勝事業所管内採卵成績優秀者表彰式挙行	
鮭鱒研究懇談会の開催	
北海道水産孵化場十勝支場釧路事業場孵化室増築落成式の挙行	
本道開発功労者表彰	
昭和二十四年度鮭鱒親魚捕獲採卵成績表 (一) (二) (三)	五一

?	〃	〃	〃
一〇	二六	二六	一七
鹹往來	鹹往來	鹹往來	鮭の訴へ
八			
二八	五二	五三	四二

◎ 雑文

著者	年次	題名	年卷	号
新井藤一郎	八	年頭所感	一〇	一
秋味三平	三	思出の千歳孵化場	一〇	一
出町初太郎	三	祝辞	一〇	一
藤田経信	一五	千歳鮭鱒孵化場創立五十周年に際して	一〇	一
半田芳男	四	鮭鱒繁殖報告に就いて	一〇	一
	七	鮭鱒孵化事業功労者としての森脇幾茂、菊地覚助兩氏への惜別	一〇	一
	七	支笏湖に奉迎して	一〇	一
	一	小池仁郎民を悼む	一〇	一
	二	光栄の北海道鮭鱒孵化場へ	一〇	一
	一	千歳の思出	一〇	一
	一	西別孵化場から虹別孵化場へ	一〇	一
	一	祝辞	一〇	一
	一	祝散の辞	一〇	一
	一	北海道鮭鱒保護協会の回顧	一〇	一
	一	北海道鮭鱒保護協会年表	一〇	一
	二	復刊の辞	一〇	一

著者	年次	題名	年卷	号
北海道鮭鱒孵化場協会	一	北海重左工門君を悼む	一〇	一
	一	北海道鮭鱒孵化場試験成績概報	一〇	一
	一	目方四貫五百匁の大鮭	一〇	一
	一	河中のエレベーター!	一〇	一
	一	若虹鱒の来游	一〇	一
	一	甜菜糖工場の河水汚毒	一〇	一
	一	鮭油中にビタミンA及Dの含有発見せらる	一〇	一
	一	自動金網戸掃除器	一〇	一
	一	浮動性養魚タンク	一〇	一
	一	鱒卵の軟化病	一〇	一
北海道鮭鱒保護協会	一〇	石狩通信	一〇	一
	一〇	沢田通信	一〇	一
	一〇	千歳通信	一〇	一
	一〇	千歳孵化場創立五十周年を迎へて	一〇	一
	一〇	虹別支場創立五十周年記念祝辞に代へて	一〇	一
	一〇	祝辞	一〇	一
	一〇	虹別支場創立五十周年を迎へて	一〇	一
	一〇	なつかしのトコロ	一〇	一
	一〇	虹別に於ける追憶	一〇	一
	一〇	千歳孵化場と其の環境を偲て	一〇	一
	一〇	千歳孵化場五十周年の思出	一〇	一
	一〇	虹別孵化場創立五十周年に際して	一〇	一
	一〇	鮭鱒繁殖の思出	一〇	一
	一〇	北海重左工門君を憶う	一〇	一

木下堅三	窪上政幹	倉上徳治郎	越田清治	小久保清一	小石季一郎	小池庚吉	小池仁郎	水上上武	水沢一郎	守谷金次郎	森脇邦子	内藤晴三益	野田信俊	齊藤光雄	齊藤栄三郎	佐々茂雄	嵯峨久	坂内深七	志茂主一郎				
一五	二五	一三	一三	一五	一〇	一五	一四	二五	一八	一五	一三	一四	一七	一八	一四	一五	一五	一七	一三				
虹別回顧	故内海重左工門さんを追憶して	千歳孵化場創立五十周年を祝して	偶感	虹別懐古	鮭鱒彙報の発刊を祝す	北海道鮭鱒保護協会の誕生に際して	虹別の昔	秋味三平大老の想出	十勝川の流れ	虹別支場創立五十周年に当り鮭鱒養殖功労者故小池先生を追慕して	三十二年前をかへり見て	発刊の辞	虹別支場創立五十周年を迎へて	祝辞	解散に名残惜みて	塩水利用の検卵法に就て	本場所属千歳事業場創立五十周年を迎へて	択捉島と孵化事業	虹別支場創立五十周年を祝す	虹別の想出を語る	当路人工孵化場新設の回顧	十一代栖原角兵衛茂隆畧歴	御照会に答へて
一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
四一	五〇	三八	三八	四一	二六	四一	四一	四三	四三	四一	三八	四一	四一	四二	四二	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一

千石吉雄	鈴木幾太郎	田中林蔵	谷口達三	徳久三種	戸塚九一郎	富永真佐利	飛島貫治	内海重左工門	渡辺宗重	渡部郁郎	八木安太郎	八木繁次郎	山本厚三	岡田萬三				
二五	一三	一五	一八	一一	一一	一五	一八	一五	一三	一三	一五	一七	一七	三四				
畏友内海重左工門君の思出	創立満五十周年記念に際して	虹別の思出	鮭鱒保護協会の解散に際して	北海道鮭鱒保護協会を顧みて	小池仁郎氏を憶う	電燈利用検卵と野鼠の駆除法	千歳孵化場創立五十周年を迎へて	虹別孵化場創立五十周年を祝し所感を陳ぶ	祝辞	虹別の想い出	鮭鱒彙報の再興を祝す	在職二十有余年を顧みて	千歳孵化場の思出	千歳川鮭鱒漁の古事に就いて	虹別孵化場の昔を語る	当路孵化場を回顧して	虹別孵化場創立五十周年を祝す	鮭鱒彙報と私
一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一	一一
五〇	三八	四一	四三	四三	二九	三三	三三	三八	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	四一	五七



## 編輯後記

○永らく休刊しておつた本誌も漸く発行の運びとなつた。

これは本誌の創刊三十周年、本道孵化事業創基八十周年、年千歳孵化場創立七十周年とお目出度いことが続出する年であるので本誌としても原稿難でもあるが少々無理して記念号を出した次第である。

○本誌創刊号を出した当時の方の中から誰かに原稿をお願いしたかつたが思う様に行かず残念であつた。

然し少々後年であるが編輯を担当された岡田さんの玉稿を戴くこと出来て面目を施した。

同氏に厚く御礼を申し述べる次第である。

○七十年前創立当時の千歳孵化場に関する故藤村信吉氏の記事とスケッチを見付けたので本誌で紹介したが藤村氏は書画に堪能な方であつただけに面白い記録を残して頂いたと感

謝に堪へない。

全道の各孵化場にも之に類したものがあらかも知れないと思うので同好の士の御研究を希望する。

○本誌の総目録は過去三十年間に二回発行してあるが今回も附録とし出した。

三十年間に寄稿された方も少くないが現況を拜見していろいろの感想が湧く。

この意味でもこの目録は何かお役にたてば幸いである。

(半田記)

### 寄稿 歓迎

一、論説、資料、趣味、地方状況通信の各欄及写真図表等の寄稿を歓迎す

一、本誌に掲載せるものには薄謝を呈す。

一、論説、資料の各欄に掲誌せる分の別刷は御希望に依り三〇部を限り無代進呈す。

一、原稿用紙は申込次第郵送す。

昭和三十四年十月廿五日印刷  
昭和三十四年十月卅一日発行

定価 金 百 円

札幌市南十四条西一丁目十四番地

編集兼 半田芳男  
発行者 電話②二八五〇番

札幌市南一条西五丁目

印刷者 小林憲司

札幌市南一条西五丁目

印刷所 小林印刷所  
電話③一六二三番

札幌市北三条西七丁目一番地

水産会館内

発行所 北海道鮭鱒増殖  
漁業協同組合

電話代表④〇二六一番

鮭  
鱒  
彙  
報  
第五十七号  
創刊三十周年記念号  
昭和三十四年十月三十一日